

エネルギーを 学ぶ・伝える・考える

SDGsを 教育に取り入れる意義

1984年の開校以来、「地域に根差した学校」として有為な人材育成を目指してきた新屋高校では、「2019年度秋田県探究活動等実践モデル校」の指定を受けたことを契機に、3年間の学習を通して生徒の「探究力」を育てる授業に力を入れてきました。1年生で「秋田を知る」、2年生で「地域で活動」、3年生で「地域に貢献」と各学年ごとにテーマを決めて探究活動を進める中、阿部先生はSDGsが地域社会について考える良いツールになると気付きます。

「環境問題やエネルギー問題など世界が取り組むべき課題を17の目標に整理したSDGsをヒントに、『地元秋田のSDGs』について生徒一人ひとりが考える探究学習を展開するようになりました。秋田のために自分たちは何ができるのか、生徒は意識的に考えるようになり、生徒は大切なのは考えて学んだことを行動につなげること。リアルに体験する実践重視の学習が必要だと考えました」

地域課題を 自分ごととして考える

2021年、新屋高校は第1期秋田県SDGsパートナーの認定を受け、「地域貢献活動」「3Rの促進」「SDGsに関連した教育活動の推進」の三本柱を明記した宣言書を発表しました。SDGsの概念について学びを深めた生徒たちは、達成に向けてさまざまな取り組みに挑戦します。年2回行われる海岸清掃活動では、約200人の生徒が海ゴミゼロを目指し、環境美化に貢献。また、SDGs普及に向けたイベントとして「SDGsフェスタ」を開催し、すごろくやボードゲームなど数種類のゲームを使って楽しみながら理解を深めました。生徒たちは交流を通してさまざまな視点から秋田県SDGsの普及促進を考え、地域課題を「自分ごと」として捉えるようになりました。



▲生徒会執行部が中心となって制作した「SDGs すごろく秋田県版」



秋田県立新屋高校が取り組む「新屋高校SSCプロジェクト」。(写真左上から時計回りに)海岸清掃活動、SDGsフェスタ、絶滅危惧種に指定された海浜植物「ハマボウフウ」の植栽、地元動物園での生物調査の様子

挑戦する気持ちを育む 新しい教育のかたち

17の国際的な目標を盛り込み、2030年までに持続可能な社会の実現を目指す「SDGs」(持続可能な開発目標)。日本でも多くの企業や学校がSDGsの達成に向けて積極的に取り組んでいます。

秋田県秋田市西部に位置する「秋田県立新屋高等学校」は、豊かな自然環境の中で地域とのつながりを大切にしながら、持続可能な秋田県の担い手となる人材を育てようとSDGsを取り入れた教育を行っています。「2021年度第1期秋田県SDGsパートナー」に認定された同校は、アントレプレナーシップ教育^{※1}の視点で県内外の企業等と連携し、「新屋高校SSCプロジェクト」(SDGs×STEAM^{※2}×Career)を立ち上げました。

「社会で必要とされる能力を育成するには、自分自身でさまざまな問いを立てて考え抜く姿勢が必要です。新屋高校SSCプロジェクトは、その力を育むための教育です」。そう語るのは、同校の阿部大輔先生。「本気で挑戦し続ける」を重点目標に掲げる新屋高校の教育活動について、お話を伺いました。

訪れた場所

秋田県立新屋高等学校
秋田県秋田市豊志石田坂字鎌塚77番地3



「新屋高校SSCプロジェクト」に中心となって携わる新屋高校の阿部大輔先生



▼同校が第1期秋田県SDGsパートナー認定を受けたときに発表した「新屋高校SDGs宣言」

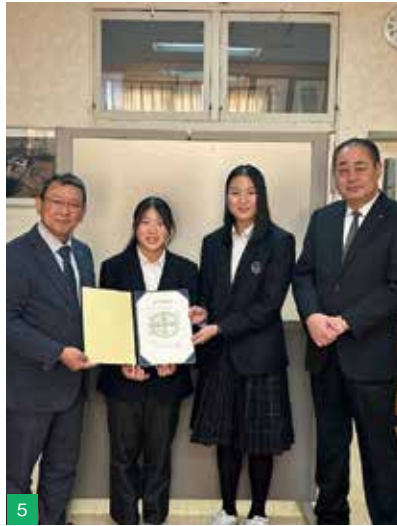
| AKITA SDGs | | |
|--|---|---|
| 1 地域貢献活動の積極的推進 | 2 All 新屋高校での3R (リデュース、リユース、リサイクル) | 3 SDGsに関連した教育活動の推進 |
| <ul style="list-style-type: none"> 海岸ゴミ拾い清掃活動や地域清掃活動、生物保全活動などの積極的な実施及び機会の増加 地域行事への積極的な参加やイベントの実施 | <ul style="list-style-type: none"> ゴミ排出量の削減 ICT機器の有効活用によるペーパーレス化の促進 リサイクル活動の増加 | <ul style="list-style-type: none"> 「総合的な探究の時間」を要としてSDGsの視点で考察したり行動したりする機会の創出と増加 SDGsの視点で自主的に行動を起こす生徒の増加 |
| 新屋高校は第1期秋田県SDGsパートナーになりました！ | | |

※1 自ら社会課題を見つけ、解決のために挑戦し、他者と協働して解決策を探究できる知識や能力などを身に付ける教育
 ※2 科学 (Science)、技術 (Technology)、工学 (Engineering)、芸術・リベラルアーツ (Arts)、数学 (Mathematics) の各分野で、教科横断的に学ぶ教育

オレンジ:1年次実施5回の平均値
青 色:2年次実施した4回平均値



6



5



4

4. 2年生が地域の菓子店「たけや製パン」とコラボし、定番商品・バナナボートにイラストをデザインした「あらこうボート」。秋田市大森山動物園で飼育するゆきひょうの保護をPRします
5. 「あらこうボート」を売り上げた収益の一部を大森山動物園に寄付。大森山動物園園長から感謝状が贈られました
6. 非認知スキルチェックテストの分析結果 (Edv Path)



3



2



1

1. 「JPX起業体験プログラム」で行われた会社設立会。1年生各クラスが立ち上げた5社は、さまざまなビジネスアイデア出しを行いました
2. 外来種であるアメリカザリガニを有効活用した肥料
3. 2年生が制作した、海洋ごみ(シーグラス)を使ったアクセサリー

将来に必要な力を身に付ける デジタル探究コースを設置

SDGsを柱とした教育活動を展開する新屋高校は、2023年度には県の事業に基づき、デジタル社会に必要な情報収集能力や行動力を身に付ける新しいカリキュラム「デジタル探究コース」を設置する指定を受けます。1年生は主要5教科や実技科目に加え、最新のICT教材やIT専門人材を活用しながら学習する「デジタル探究コース」を受講し、デジタル社会で活躍するための基礎を学習します。2年生からは志望する進路に合わせて「教養」「文系」「理系」の3類型に分かれて学習する一方で、既存の「地域探究コース」もしくは新設となった「デジタル探究コース」のどちらかを選択します。

「今後ますますICTが加速し、変化の激しい社会となります。将来の予測が困難な時代の中で失敗を恐れず、挑戦し続けるマインドを育むために、起業を通して実践的な学びを深める起業体験プログラムをつくりたいと思いました」

者から『それで利益が出せるのか』と突き返される場面がありました。厳しい意見に落ち込む様子も見られましたが、評価を真摯に受け止め、どうしたら経営者を納得させることができるか主体的に考える姿に大きな成長を感じました。地域の大人たちが本気でぶつかるからこそ、生徒たちもその思いを受け止めて、奮起して良いものを作り上げる。ただ調べて発表させる探究ではなく、リアルな場で喜怒哀楽を味わえることが、このプロジェクトの肝だと思っています」と阿部先生。

また、翌年の2024年、デジタル探究コースを選択している2年生は、「地域社会を少しでも良くする!」というコンセプトのもとに「合同会社あらこう」を設立。実業の世界に触れる第1歩として模擬ビジネスを実践的に学んだ「JPX起業体験プログラム」での学びを土台に、次のステップとして、「合同会社あらこう」の中で、企業内起業に挑戦することになりました。

事業内容としては、生態系を壊すアメリカザリガニに付加価値を付ける「アメリカザリガニ肥料生産販売」(写真2)や、シーグラスを使ってアクセサリーを制作する「海洋ごみの有効活用・販売」(写真3)、地元の菓子店と

阿部先生は、これからの時代を生きていくために必要な力を養うため、デジタル教育とアントレプレナーシップ教育をハイブリッド的に取り入れた実践重視のプロジェクトに取り組みました。こうしてSDGsにSTEAM教育、キャリア教育を絡めた「新屋高校SSCプロジェクト」は、新屋高校のスクールポリシーとしてスタートしました。

リアルでの体験と実践を重視した起業体験 「新屋高校SSCプロジェクト」

「新屋高校SSCプロジェクト」では、総合的な探究の時間を軸に、教科等横断的な学びを展開し、「論理的思考力」「提案力」「問題解決能力」を育むことを目指します。2023年、1年生5クラス160名は商品開発、販売会、株主総会を通して経営の基本を学ぶことを目的に日本取引所(JPX)が提供する起業体験プログラムを活用して、各クラスごとに模擬会社を設立。商品開発では地域の名産や食材等を活用し販売する商品を「投資家役」となった地元企業の経営者に、ユーモアを交えた高校生らしい事業プレゼンテーションを行いました。「生徒たちは、経営

コラボし、生徒たちが考えたイラストをデザインした商品の開発(写真4)など、自由な発想で地域課題を解決に導くためのさまざまなアイデア出しを行い、現在も主体的に取り組んでいます。

これらのアイデアをビジネスの「かたち」にする過程において、生徒たちは社会の仕組みやルールによって思い通りに進められない「つまづき」や「挫折」を経験することもあります。しかし、実業の世界の現実を知ること、次のアイデアを生み出す力を育てることにつながるのです。

さらに同校では、「新屋高校SSCプロジェクト」を通して、生徒がどのように成長し、変容したのかを図る指標の一つとして、「非認知スキルチェックテスト」(Edv Path)を活用していることも特長の一つです(写真6)。

「分析結果では『自己理解』『社会/他者理解』『セルフマネジメント』など自己肯定感に関する項目で数値の向上が確認されていますが、私たちが特に重視している項目は『責任ある意思決定』です。社会で活躍するためには、自分で考えて実践する経験を積むことがとても重要です」と阿部先生は力強く語り、プロジェクトの効果を目を細めます。

将来が予測しづらい時代を

生き抜く力を

環境やエネルギーなど多くの課題を抱える現代社会。物事の先を予測しづらいUCA(ブーカ)^{※3}とよばれる時代を生き抜くために、阿部先生は生徒たちにとどのような力を身に付けてほしいと考えているのでしょうか。

「将来、生徒たちが本気で挑戦するとき、必ず壁にぶつかることがあると思います。そのときにどうやって乗り越えるのか、臨機応変な対応力が必要になるでしょう。課題を解決へと導く力を身に付け、プロジェクトで学んだ経験を生かして、困難を乗り越える力を育んでほしいと思います」

プロジェクトの取り組みは、デジタル探究コース以外の生徒にも波及しています。未来技術推進協会が提供するSDGsのボードゲーム「Sustainable World BOARD GAME」の秋田県版を制作しようと、2023年12月から約1カ月の間クラウドファンディングを実施し、2024年3月に30セットを作成しました。

広い視野を持って

地域を考えていく

地域社会とのつながりを大切にしながら、起業体験やSDGsを通して生徒の力を育む「新屋高校SSCプロジェクト」が評価され、同校は令和6年度秋田県「環境大賞」(学校教育関係部門)を受賞しました。

今後はグローバル化も推進していく方針で、2023年にはタイの留学生を受け入れるなど国際交流にも力を入れています。阿部先生は「さまざまな文化や価値観を知ること、また新しいアイデアが生まれるでしょう。世界に向けてグローバルな視点を持ちながら、本気で挑戦してほしいと思います。そして今後も『新屋高校SSCプロジェクト』の内容をブラッシュアップしながら、失敗を恐れずにチャレンジしていく文化を作っていただきたいと思います」と話します。生徒たちはさまざまな課題に挑戦しながらたくましく未来を切り拓いていってほしい。

本気で挑戦



SDGs教育への思い

校長 浅利宏先生

第1期秋田県SDGsパートナーに認定された本校は、地域に根差した教育活動を進めています。地域との密な連携の中で、自らの経験を通して学びを深めることは、生徒たちの将来に密着したキャリア教育を体現していると感じています。生徒たちが本校での学びを将来に結びつけて、巣立ってくださることを願っています。



7. 秋田県「環境大賞」学校教育関係部門を受賞。「新屋高校SSCプロジェクト」内で地域とともに行った教育活動が評価されたと阿部先生は話します

※3 Volatility (変動性)、Uncertainty (不確実性)、Complexity (複雑性)、Ambiguity (曖昧性)の頭文字をとった言葉。物事の不確実性が高く、将来の予測が困難な状態を指す造語